



平素は、弊社商品にお取り組み頂き、まことに、ありがとうございます。月間通信 3 月号をお送り致しました。何卒、よろしくお願い致します。

このピザ窯は何年か前に作ったもの。隣の燻煙器も含めてレンガを 4000 個と耐火レンガも 1000 個くらい使っている。当時は、此处で『薬膳の郷』の様な事を考えていた。また、顧客企業の研修施設としても機能させたいと考えていた。だから、一度にピザが 10 枚ほど焼けるサイズにしようと目論んだ。実際には 7~8 枚ほどは焼けるサイズに出来ている。だけど、その後ある企業の社員研修が此处で開かれた。それに参ってしまい、こころ通わぬ人の来訪はもう勘弁してよと思うようになり、以来ひとりふたりの来客時や、私たち夫婦の為に 1 回 3 枚程度のピザを焼くだけになっている。広い窯の中の温度を 250℃くらいにする必要があるのだが、それには薪ストーブひと晩分くらいの薪の量が要る。

その割に、狭い入り口に加えて煙突部分も入り口に有るため、薪を燃やすのにひと苦労していて、今まで正直使いこなせていなかった。前回に何とかこうすればというのを思いついた。要は慌て者だから先を急ぎ過ぎて、薪が燃えるのを待つより、燃やそうとしていた。

ようやく、今回コツを見出したような気がする。画像の火の位置が窯の一番手前になる。煙突はその更にレンガ 1 個分手前の導入部の上。此处で十分に燻が出来るまでひとしきり薪を燃やしておく。太めの薪を両側縦に置き、真ん中に少し細めを置く、其処に横渡しに 2 本程度積み、その 2 本と下の細目に火が付くように焚付けを燃やして暫く放置しておく。その間近くで別な作業をしていければいい。今回はこの隣のキウイフルーツに腐植酸と菜種油粕の発酵肥料を撒いて、管理機で耕運していた。途中で戻ってみると真ん中の下が燃え盛っていた。そこで、下の両端の 2 本を少しずつ奥へ押しやり、3 段目に太めの薪を 2 本縦に積み重ねた。これらの薪は、ややこしいがマキという樹。3 本植わっていたが、これがやたらと大きくなってうっとおしいので、数年前に倒して玉切りにしておいた。昨年薪割り機を購入したので、それを薪にして今年はストーブに使っている。常緑針葉樹なので火力もソコソコにあるように思う。これくらい燃えれば良いかなと思い、これらを左の真横 3 分の 1 くらいに燻ごと追いやって、念のため新たに 1 本放り込んでおいた。その薪にも火がまわったので、右側の空けたスペースの熱を計ってみた。250℃程度に温度計の針が示しているので、もう頃合いかと思い、準備出来ていた自家製のピザを入れてみた。

十分な温度まで上がっていたのか、5分程度で左右を回転させて、都合10分で焼き上がった。1枚目を食べている間、同時に焼いた手前の1枚を窯の入り口付近に待機させ、保温のつもりだったがそうは上手くいかず、縁は黒く焼け焦げていた。それでも、底はパリッとして美味かった。上の画像が3枚目で焼け具合を見張っていた甲斐あって、美味しそうに仕上がった。そもそも、カンツォーネというピザの包み焼きを前週にキッチンストーブで焼いたら、この上なく美味かったので、その次の週は外の窯でピザを久しぶりに焼いてみるかと思ひ、春の陽気に誘われもして、やってみた次第。

さて、このところ気持ちが先へ先へと走って自分でも管理しきれない。アメリカの姉さんからポートランドの日本仏教協会の集まりがあって、そこで『定業』と法話の中で出て来た、『その行い、必ずやあなたの元に』ということ思う。が、あなたならどう解釈しますか。と書いてあった。聞いたことがない言葉だったので、調べてみると『前世の行為により報い（果）を受ける時期が確定している業。避けることのできない運命』との事だった。

それで、……Googleでも調べると、同じように前世から定まっている業だと出て来た。どうも、仏教界のひとは大げさだと思う。昨年暮れに、摂津でひと仕事して高槻の自宅に戻る車の中で、自分が何をしに、父と母を選んで生まれて来たか気がついて、正月2日の朝目覚めた時、それだけではなく父と母も自分を選んで生んだ、という事が分かって胸が震えた。だから、前世ってこういうものがあることになるけど、どうも、それを『業』と呼んでしまうと、一種悲壮感を伴ってしまう。義務というか、逃れられないものとしての性格がこびりついてしまう。…中略…今回果たせなくても、また生まれてくれば良いだけで、どうせ半永久的に続いているんだし、そもそも果たしたい事なんて、自分が勝手に作り出しているだけだから、自分で管理できる筈だよ。それを、自分ではどうにもならない事のように捉えて縛り付けるのは、自分たちが達観して優位に立つために、単なる事実をそんな概念で包んでいるように思う。

多分、父はそんな事に気づいていて、そうじゃないよと言いたかったのだと思える。だから、自分が父の跡を継いで、そんな事を言い始めているような気がして来て、ここんとこ、月間通信に書いていた。それが、1月と2月のテーマだった。……と返信した。

この3月は一昨年亡くした母の法事をすると言われて来ていて、久しぶりに読経を聴く。父の世代からいうと孫にあたる方なのだが声がそっくりで、坊さんの価値は声色で決まるのではないかと思うほどいい声をしている。ほんとに冥土と繋がりそうな気がする。般若心経の写経も随分して、墨と水と空気を練り、筆に染み込ませて半紙に写すことを文字通り写経というが、炭素・水素・酸素の化合物が命の鍵を握ると教わって、農業の基本も此処にあると思って来たが、この間読んで来て読み上がった書籍には、そこに窒素が加わって酵素となり、この酵素こそが生命の起源だと書いていた。

調べてみると、タンパク質は特定の単一化学式で表されず、20種類のアミノ酸がペプチド結合で長鎖状に重合した高分子化合物ですと言っている。気になっていたN(窒素)がその化学式に出て来た。この酵素という代物はかなり重要な役目を担っているらしいが、今少し理解が出来ない。遺伝子も酵素なの？ではなく、遺伝子が酵素の設計図らしい。つまり遺伝子が仲立ちになって酵素が働いて事なのかもしれない。元はひとつの胚と云うのか細胞から分裂し、右手の小指になるのか左足の小指になるのか、この遺伝子と酵素が作用して出来上がっているのかも知れない。

そうであれば、この【業】というのも遺伝子なり酵素なりに染み付いていると考えられる。業というのが前述返信の生まれて来た意味とは別にあるとすれば、人固有の思い込みがこれに当たるのではないかとも思う。もしそうなら、その概念から自由になることは重要で、身体に入ってくるようにすると共に、入って来ても頓着しないで流し去ることがコツとなるかな。